

〈実践報告〉

“Intensive Courses for TOEFL”の取り組み

—グローバル人材育成推進事業における英語教育に関する一考察—

同志社大学 全学共通教養教育センター助教 丸田祥一

同志社大学 全学共通教養教育センター准教授 和泉絵美

同志社大学 全学共通教養教育センター助教 小島直子

1. はじめに

2013年4月、同志社大学は文部科学省「グローバル人材育成推進事業（Go Global Japan。以下GGJ）」の採択を受け、集中英語コース“Intensive Courses for TOEFL（以下、I.C.T.と略称）”を開講した。4年間にわたる本事業の最終年度を迎えるにあたり、本稿では、授業を担当する教員の立場から、日々の実践内容とそれらを通じて見出した事柄をまとめ、報告する。まず、I.C.T.の基本構成と目的について説明した後、授業における具体的な取り組みを紹介する。更に、現時点までに得られた結果や、取り組みの中で直面した課題、およびそれらに対する解決策（案を含む）についても述べる。最後に、これらを統括した上で、グローバル人材教育をより充実させるための全学的連携の重要性について触れる。なお、本稿執筆にあたり、他大学でのTOEFL講座の取り組み例として、小山ら（2012）や森下（2014）など複数の報告を参照した。

2. I.C.T.の基本構成

I.C.T.は“Practice”および“Tutorial”の2科目が1セットとなって構成されており、1週あたりPracticeとTutorialはそれぞれ90分（ただしPracticeはクラスによっては45分×2回ⁱⁱ）の授業が行われる。単位数はそれぞれ1単位の計2単位で、いずれのクラスも定員は20名であるⁱⁱ。Practiceでは、学内での留学生選考の際に求められるTOEFL ITP（リスニング・文法・リーディングを対象とする。以下ITPと略称）の受験対策を行い、Tutorialでは、ITPに「スピーキング・ライティング」を加え、文法を除いた4技能を対象とするTOEFL iBT（以下iBTと略称）対策を通じ、留学時に必要な「講



義を聴く、ノートを取る、意見を述べる、レポートを書く」などの訓練を行っている。

TOEFLはITP、iBTともに難易度が高く、スキル向上のためには一定期間の訓練を要するが、本コースは半期完結型であるため、あらかじめコースの目的を明確にした上で対象範囲を限定し、それらに集中的に取り組むことにしている。

3. I.C.T.の目的と授業における取り組み

I.C.T.のカリキュラムにおいて、最も重視しているのは、以下の4点である。

- a) スコア向上のための特定の技能習得を目指す。加えて、TOEFLの受験問題に限定されない拡張性を持たせる
- b) 留学やグローバルな分野での活動に対する学生の興味・関心を喚起する
- c) 留学を希望しない学生であっても、英語力向上を図れるコースにする
- d) 講座終了後も学生が自律的に学習を継続できるよう導く

以下では、これらの目的と関連付けながら、Practice、Tutorialの各授業で行っている取り組みを紹介する。

3.1. Practiceにおける取り組み

■ TOEFL ITPスコアアップに向けた学習

基本的には、指定教科書（田地野ら（2012）およびStaffordら（2010））に収録されている実践問題を解きながら各セクションの問題に慣れ、テストスキルを習得する。このプロセスは一般的な受験訓練と変わるところがなく、語彙力の増強や多聴・多読、文法学習などの地道な訓練が中心である。しかし、授業が解答確認に終始しないよう、教員それぞれが独自の工夫を行っている（詳細は表1）。

■ pre-test（事前テスト）とpost-test（事後テスト）スコアの変化の測定

コース開始時の学生の能力を測るために、田地野ら（2012）に収録されている過去問題を使用したpre-testを授業内に実施している。また、これに対応するpost-testとして、学期終盤の12～14週目に、実際のITPテストを受講生全員が受験し、スコアの変化を測定している。pre-testの実施環境は本番とは異なるため厳密性を欠くが、時間と予算の都合上、実際のITPを1学期間に2回実施することが不可能なため、あくまでもスコア変化の目安として用いている。両テストのスコアの変化については、4.2で具体的に示す。

■ 学内における留学・国際交流支援に関するガイダンス

学内の留学業務全般を担う国際課およびラーニング・commons留学相談コーナー（今出川校地のみ）を訪問し、同志社大学の留学制度について担当者から説明を聞く機会を設けている。これは、留学に漠然と興味はあっても具体的に何をすべきか戸惑う学生に、実際の留学準備の手助けを行うことが目的である。また、これに合わせ、留学生課と学内の語学学習施設（図書館の洋書コーナーやマルチメディアライブラリー）にも立ち寄り、留学生と交流する方法や、自習用設備の紹介も行っている。さらに、Practice、Tutorialを問わず、担当教員が自身の留学体験談を話したり、個別の学生の留学相談に応じたりするなど、様々な形で留学支援を行っている。

3.2. Tutorialにおける取り組み

■ TOEFL iBT対策

Tutorialにおいては、留学時に遭遇する状況（講義を聴く、ノートを取る、意見を述べる、レポートを書く等）を想定しながら、これらの総合的スキルが求められるiBTの対策を行っている。iBTには、一つの問題の中に「読む→聴く→話す」といった複合的スキルを求めるタスクが含まれるため、各タスクをいくつかのステップに分けて訓練している。指定教科書（Beaumont, 2006およびFellag, 2006）も、模擬問題と解答だけを収録した問題集タイプではなく、Note-takingや空所補充などの演習を交えながら、段階的に解答へと導く練習本タイプを採用した。

■ スピーキングとライティング対策

時間的制約およびPracticeとの差異化のために、TutorialではITPには含まれていないSpeaking SectionとWriting Sectionに比重を置いている。ただし両者ともに、「読む→聴く→話す又は書く」といった複合的な作業を伴う“Integrated Tasks”を含むため、これに必要なリーディングとリスニング対策はTutorialでも行っている。スピーキングについては、基本的にはクラス内またはグループ内発表を数回行い、ライティングは数回のエッセイ提出を課題としている。学生の能力差が著しいため、エッセイの長さやスピーキングの発表回数は各教員の裁量に委ねているが、基本的には教科書に収録されている様々なタスクの中から、学生の興味・関心を惹きやすいものを選別している。

以上がPracticeおよびTutorialにおける取り組みの概要である。具体的な実践内容は、表1にまとめる。ⁱⁱⁱ



表1. I.C.T.の授業における実践内容の例

Practice	Section 1 (Listening) <ul style="list-style-type: none"> ➤ 会話文のロールプレイ ➤ 頻出フレーズ・イデオムの習得 ➤ 音声・リズムなど、発音の訓練 ➤ リピート・シャドーイング ➤ ワークシートを用いたディクテーション ➤ TOEFL以外の学習リソースの紹介、など
	Section 2 (Grammar) <ul style="list-style-type: none"> ➤ 頻出項目の演習(主語—述語の一致、品詞、並列、関連句、倒置、時制など) ➤ 文章の基本構造分析(SVの特定、構文やイデオムの特定、全文和訳など) ➤ 模擬問題演習、など
	Section 3 (Reading) <ul style="list-style-type: none"> ➤ 設問パターンの把握(Main idea, Concrete idea, Inference, Vocabulary, Exception Questionsなど) ➤ 「設問→本文→選択肢」の関連づけ ➤ Skimming, Scanning ➤ 時間測定による速読練習 ➤ グループワークによるリーディング問題の作成と解説、など
Tutorial	Speaking Section^{iv} <ul style="list-style-type: none"> ➤ Warm-upとして短時間ペアトーク ➤ 相手を次々に交代しながら連続ペアトーク ➤ 「Note-taking→空所補充→スピーキング原稿作成→ペアワーク」の一連演習 ➤ iBTの評価基準(ループリック)を用いたペア間評価 ➤ リーディング課題のsummary作成・発表 ➤ ライティング原稿をスピーキング風にアレンジして発表 ➤ チームに分かれてディベート ➤ 教科書の題材に関するプレゼンテーション ➤ 留学生との交流、など
	Writing Section <ul style="list-style-type: none"> ➤ ライティングの基本構造(Introduction, Bodies, Conclusion)の理解と定着 ➤ iBTのループリックを用いた、良い/悪いエッセイの比較 ➤ 情報教室でのTOEFL公式サイト閲覧およびPC操作 ➤ スピーキングで用いた原稿をライティング風にアレンジ ➤ 200~400語のエッセイ課題、など
	Speaking & Writing Section共通 <ul style="list-style-type: none"> ➤ 「読む→聴く→話すor 書く」(Integrated Tasks)の一連演習
Practice Tutorial 共通	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 語彙力強化のための単語帳作成、定期小テスト ➤ TOEFL問題と関連するテーマの映像・画像の紹介 ➤ 英語による授業

Practiceの大半はITPの受験スキル向上に向けた反復作業の多い地道な練習である。検定試験対策として避けることのできない単調さの中に、いかにして学生の興味関心

を刺激し、コース終了後も自律的な学習継続を促すことができるかが重要な課題である^v。iBT対策としてのTutorialは、Practiceよりも扱う技能が多岐にわたるため、指導や展開の方法も多様である。教員よりも学生が話したりタスクに取り組んだりする時間が長いのも、Tutorialの特徴である。教員も学生も、この「枠の広さ」に苦手意識を持つのではなく、英語学習の豊かさとして楽しみながら取り組むことが重要である。

4. 現在までの取り組みの結果

I.C.T.の目的の達成度を評価するにあたっては、一定の基準が存在しない。そのため、断定的な評価は下せないが、本章では、2013年4月の開講からの3年間にわたる関連データ（受講者数の変遷、pre-testとpost-testのスコアの変化、授業評価アンケートの結果、留学プログラムへの合格者数）を通して、現時点（2016年1月）までの取り組みから得られた結果について考察する。

4.1. 受講者数

表2に、2013年度春学期から2015年度秋学期の受講者数の推移を示す。2013年度は1年次生のみが受講可能で、その後1年次ずつ範囲を広げ、2015年度は3年次生までが受講可能となった。

表2. I.C.T.受講者数の推移（2013～2015年度）

年度	学期	定員数(人)	受講者数(人)	充足率(%)
2013	春	180	164	91.1
	秋	180	157	87.2
2014	春	360	309	85.8
	秋	380	262	68.9
2015	春	440	369	83.8
	秋	380	291	76.5
合計／平均		1,920	1,552	80.8

初年度である2013年度は、1学期あたりの定員数180名に対し、受講者数は春学期164名、秋学期157名であった（充足率はそれぞれ91.1%および87.2%）。2014年度は、2013年度の受講希望者数や、対象学年が拡大する事情を鑑み、定員数を360名に倍増



した。その結果、受講者数は、春学期309名、秋学期262名となった。規模の拡大により受講者数そのものは増えたものの、2013年度よりも春学期と秋学期の充足率の差がより顕著に現れた。これは、学内での留学生選考のスケジュールとの兼ね合いから、春学期に受講を希望する学生が多いことが原因であると推測された。そこで2015年度は、春学期のみ定員を440名に増やし、秋学期よりも比重を置いた。また、登録前の科目説明会等において、秋学期にI.C.T.を受講した場合の留学までのロードマップを示すなど、秋学期受講のメリットを説明する工夫を行った。その結果、秋学期の充足率が7.6%上昇した。しかし、前述の理由により、依然として春学期での受講を希望する学生が多いのが現状である。

4.2. TOEFL ITPのスコアの変化（pre-testとpost-test）

3.1でも述べた通り、I.C.T.受講の効果を測るための一手段として、受講生は学期の序盤と終盤にpre-test（模擬形式のITP）とpost-test（公式のITP）を受験し、スコアの変化を確認する。図1に、現在の測定形式を使い始めた2014年度春学期から2015年度春学期に両方のテストを受験した686人分の結果を散布図として示す。また、表3に、pre-testのスコアグループごとにpost-testとのスコア差異の平均を示す。ただし、pre-testとpost-testで受験形態が異なること、また受講生達はI.C.T.以外にも英語を学習する機会を持っているであろうことなどから、あくまでも参考値として参照されたい。

図1. pre-testとpost-test間のスコアの変化（散布）
（2014年度春学期から2015年度春学期の3学期間。686人分）

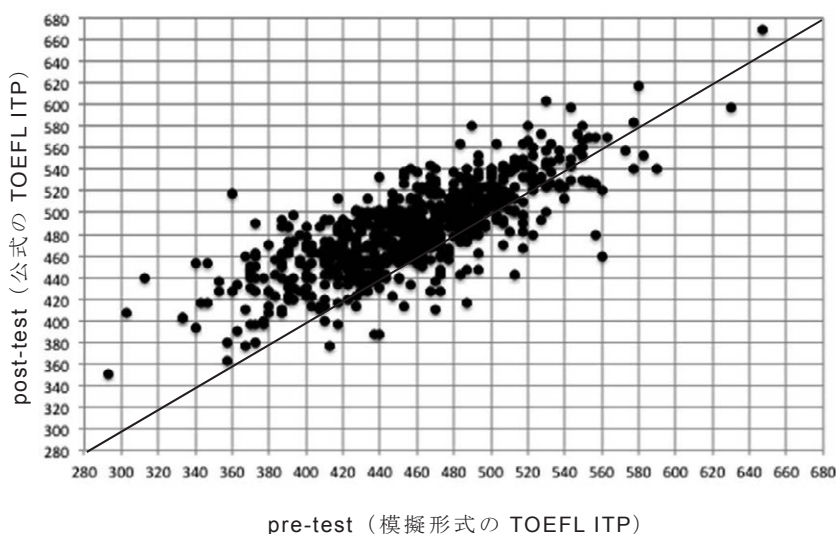


表3. pre-testとpost-test間のスコアの変化（平均）

pre-test スコア	人数 (人)	post-testとの差異の平均 (postスコア - preスコア)	標準偏差
～399	79	+62.8	29.6
400～449	218	+26.9	25.1
450～499	262	+21.1	25.6
500～549	105	+9.8	24.0
550～599	20	-15.4	34.2
600～	2	-5.0	28.0

表3によると、pre-testのスコアが399以下だったグループのpost-testとのスコア差異は+62.8、400～449のグループは+26.9、450～499では+21.1、500～549では+9.8、550～599では-15.4、600以上では-5.0であった。この数値や、図1の散布図からも分かる通り、pre-testのスコアが低いほどpost-testでの伸び率が大きくなる傾向にある。また、各グループの規模が異なるため厳密な考察ではないが、表3によると、pre-testのスコアが低いもしくは高いグループ（～399、550～599、600～）の方が、中間のグループ（400～449、450～499、500～549）よりも標準偏差が高いことから、個人間のばらつきが大きいことが読み取れる。これらの平均値が示すI.C.T.のコース全体としての効果については、適切な比較対象を見つけるに至っていないため考察を控えるが、実際の学生指導においては、各学生の目的に応じてpost-testでの目標スコアを設定し、その達成度を検証しているのが現状である。

4.3. 授業アンケートの結果

アンケートは2013年度秋学期より学期末に授業時間内で実施し、学生の満足度とI.C.T.の効果を明らかにする目的で行った。作成はI.C.T.担当教員が行い、全部で14項目、4つのセクションで構成した。最初の3セクションは全ての項目において5件法を使用し、該当する回答を選択してもらった。最後のセクションは自由記述とした。Practice とTutorialでは基本的に同様の項目を使用した。選択肢など細かい部分はクラスの目的などに合わせて調整した。2013年度春学期は質問項目や実施方法が異なるため、分析から除いた。本稿では2013年度秋学期から2015年度春学期に実施した4学期分のデータを紹介する。特に、実践実績として学生の満足度、留学に対する意欲の変化、英語学習に対する意欲の変化の3点に焦点を当てて述べる。

有効回答者数は2013年度秋学期が115名、2014年度春学期が236名、2014年度秋学期



が281名、2015年度春学期が369名であった。表4にあるとおり、「この授業を受講して、全体的に満足でしたか」については、4学期全てにおいて85%以上の学生が「非常に満足」または「満足」と回答した。「英語学習に対する意欲に変化はありましたか」についても同様で、4学期間全てにおいて、85%以上の学生が「非常に上がった」または「上がった」と回答した。最後に、留学に対する意識に変化はありましたか」についても、4学期全てにおいて70%以上の学生が「非常に上がった」または「上がった」と回答した。なお、留学意欲の高まりが全体的な満足度や英語学習意欲の高まりに比べて低めなのは、I.C.T.は留学を希望しない学生も多数受講していることが一因と考えられる。以上の結果から、学生の多くはI.C.T.に対して満足しており、英語学習や留学に対しても履修前と比較して、より肯定的に捉えていると考えられる。

表4. I.C.T.を肯定的に評価した学生の割合

年度	学期	満足度の高い割合(%)	英語学習意欲が向上した割合(%)	留学意欲が高まった割合(%)
2013	秋	89.0	90.4	77.3
2014	春	90.7	85.0	73.0
	秋	93.0	88.5	74.5
2015	春	89.4	87.4	71.6
全体		90.5	87.8	74.3

4.4. 留学プログラムへの合格者数

3でも示した通り、留学を始めとするグローバルな活動への関心を喚起することはI.C.T.の目的の一つである。その現況を知る手段として、表5に学内の留学プログラムへの合格者数^{vi}をI.C.T.受講年度ごとに示す。学内には様々な留学プログラムが存在するが、ここでは国際課が提供する中～長期の派遣留学プログラム（半年～1年間、主に専門科目を受講する）および Semester・プログラム（4ヶ月間の語学研修）への合格者数のみを示す。

表5から読み取れる事項の一つとして、I.C.T.受講時期と留学時期の関係がある。例えば、派遣留学プログラムの場合、2013年度のI.C.T.受講生は、2015-2016年度に留学するケースが最も多い(16名)。また、2014年度受講生は、2016-2017年度に留学するケースが多い(31名)。本プログラムへの応募時期がプログラム開始の約1年前であることから、I.C.T.受講終了後、1年ほどの準備期間を経て応募、合格し、更に1年後に留学するケースが多いことが分かる。Semester・プログラムに関しては、まだ2年分

しかデータが存在しないため考察は控えるが、今後もデータを継続的に観察することにより、留学を希望する学生にとってより有益なコースとなるよう改善を続ける。

表5. 学内の中～長期留学プログラムの合格者数

受講年度	派遣留学プログラム 合格者数(人)			Semester・ プログラム 合格者数(人)	
	2014-2015	2015-2016	2016-2017	2014	2015
2013	6	16	3	3	4
2014	1	14	31	1	18
2015	対象外	0	20	1	3
合計(I.C.T.受講生)	7	30	54	5	25
合格者数(全体)	126	135	139	60	89
I.C.T.受講生の割合(%)	5.5	22.2	38.8	8.3	28.1

5. グローバル人材育成コースとしての今後の課題

前章までに、I.C.T.の取り組みとそこから得られた結果について述べた。本章では、取り組みの過程で直面した問題をまとめ、今後の課題として検討する。また、グローバル人材育成における全学的連携の重要性についても触れる。

5.1. Pre-testの実施方法の問題

3.1で述べた通り、I.C.T.受講前後のスコアの変化を測定するために、Practiceの第1～2週目にpre-test、第12～14週目にpost-testを実施している。post-testについては、大学が受験料を負担し、学内で実施される実際のITPを受講生に受験させているが、pre-testは、大学の予算とITPの実施スケジュールの都合上、田地野ら（2012）に収録されている過去問題を授業時間内に解かせる模擬形式で行っている。異なる受験形式ではpre-testとpost-testの厳密なスコア比較ができないため、スコアの変化はあくまでも参考値という位置づけである。より客観的な比較測定を実現するために、大学からの更なる受験料の補助も含めて、今後も改善の模索が必要である。

5.2. 受講生間のレベル差

開始年度である2013年度は、登録前に受講生のレベルチェックを行うことができな



かったため、どのクラスにも初～上級者が混在していた。この問題を解消するため、2014年度春学期より、ITP480以上の学生を対象とする上級クラスを編成した。ただし、規定スコア以下でも意欲があれば受講できるよう、英語能力の証明は義務づけず、参考目安として「ITP480以上、iBT 54、TOEIC 530、英検2級、IELTS 5.5以上」を設定し、学生による自己判断での登録を可能にしている。上級クラスの設置により、いく分レベルコントロールは行いやすくなったが、現在も上級者が通常クラスに在籍していたり、逆に、上級レベルにない受講生が上級クラスに在籍していたりする問題も発生している。名実ともに厳密な意味での上級クラス実現のため、2016年度は、ほぼ全ての在学生在が受験するCASECのスコアを参考基準（600以上）として追加導入すること、また、シラバス上にそれらの目安を強調して表示することなど、更なる工夫を行う予定である。また、今後の履修者の人数やレベル次第では、能力証明を義務づけた少数精鋭クラスの設置も必要かも知れない。

5.3. より適切な授業時間数

一定量の情報を短時間で処理する高度な能力が求められるTOEFLへの対策において、PracticeとTutorialのそれぞれに与えられている90分×15回という時間数が十分であるかどうかについては議論の余地がある。I.C.T.は初級者も履修しているため、ITPとiBT双方の全セクションを基礎から網羅し、実践レベルにまで高めるには、かなりの学習量が必要だからである。限られた時間を有効活用するため、コースの対象をITPまたはiBTのいずれかに統一し、より集中的に取り組むことも検討したが、ITPは学内での留学者選考に用いられているし、iBTは現在、留学のための英語テストとして主流となりつつあるため、いずれかを省くことは適切でないと判断した。その結果、両者に共通するリスニングとリーディング対策はPracticeを中心に行い、Tutorialではスピーキングとライティングに比重を置くという現状に落ち着いているが、ITPとiBTの両対策として十分な時間が確保されているとは言いがたい。

現状では、授業はあくまでも学習方法に対する気づきや、モチベーション向上の機会と位置づけ、授業で得たことを基に学生が積極的に自主学習できる環境を提供していく、という方針を堅持している。今後ITP、iBTの世の中での位置づけやニーズがどう変化していくかを注視しながら、より適切な授業時間数と形式を検討する必要がある。

5.4. TOEFL iBTの受験機会

TOEFLは2006年より、従来型のマークシート方式からインターネット上で受験する現行のiBTに変更となった。従来型テストはPBTもしくはITPという名称で現在も継続されているが、ともに留学時の英語力を証明するスコアとして受理する教育機関が減少しているため、留学希望者はiBT受験が必要となるケースが増えつつある。しかし現実には、試験時間の長さ（約4時間）や受験料の高さ（US \$230）から、多くの学生にとっては受験のハードルが高い。また、iBTにはITPのような団体受験制度が整備されていないため、定期的な学内受験も不可能である。そのため、TutorialでiBT対策を行っていないながら、学生の実力測定ができていないのが実情である。これを補うため、例えばTOEFL運営団体であるETSが提供しているOnline Practice Test（過去問を用いたiBTの模擬試験で、受験料はUS \$45.95）を受験させるなどの対策が必要かもしれない。そのための受験料補助を含めた環境整備も今後の課題である。

5.5. 留学支援のための連携

留学の促進がI.C.T.の重要な目的であることを踏まえ、留学諸業務を担当する国際課やその他の学内施設を訪問するなどの工夫を行っていることは、3.1で触れた。更に新しい取り組みとして、国際課が主催する課外TOEFL講座に対してI.C.T.教員がアドバイスを提供したり、国際課とI.C.T.教員との間で留学や英語学習に関する各種イベント情報を共有したりするなど、より多面的な協力関係を築きつつある。

こうした連携は今後も一層深めていく必要がある。それは、留学の支援にあたり、I.C.T.単独では超えられないいくつかのハードルが存在するからである。例えば、留学が卒業時期や就職活動に与える影響、ゼミや実験その他、留学計画に影響を及ぼす学部内の事情、学生の金銭上の都合、などである。これらを理由に、留学に興味を持ちながらも躊躇したり断念したりする学生は多い。このような問題について、積極的に関連部署との情報交換を行い、改善に向けた連携を深める必要がある。

以上、I.C.T.が直面している様々な課題に触れたが、これらはI.C.T.教員とその所属先である全学共通教養教育センターが単独で解決できるものではない。留学を視野に入れたグローバル人材育成における英語教育には、語学学習により適した時間数の確保、レベルの設定、部署間・学部間の連携、奨学金・受験料補助等の大学予算の柔軟運用など、全学的な協働体制が求められていることを指摘しておきたい。



6. まとめ

本報告では、2013年4月のGGJ開始と共に開講された英語集中コースI.C.T.について、その基本構成、目的、実際の取り組み、課題などを示した。また、その取り組みに基づいて、グローバル人材育成における全学的支援の必要性についても触れた。いかなる場合でも、新たなコース構築と運営には様々な苦労や困難が伴うものである。I.C.T.においても、初年度はゼロからのコース構築、2年目はコース拡大による新任嘱託講師との連携、その他基本的な課題の解決など、コースの基盤を固めていく期間となった。3年目を終えようとしている現在（2016年1月）、ようやくルーティンの上でコースを運営できている感覚が持てるようになった。来年度（2016年度）でGGJが終了するが、I.C.T.は学生が留学を始めとするグローバルな活動を展開するために必要な英語力を養う場として再来年度以降も継続する予定である。同志社大学におけるグローバル人材育成の一端を担うコースとしてよりふさわしい形式・内容へと改善すべく、引き続き課題の解決に取り組みたい。

-
- ⁱ 当初は30分×3回のクラスも存在したが、効率性の低さおよび受講生からの意見を鑑み、2015年度からは廃止した。90分を2～3分割した授業編成は、「より習慣的に英語を学習する機会を設けることにより、より良い効果が期待される」という、GGJ申請時の構想調書に示された知見によるものである。
 - ⁱⁱ 2013年度のみ、Practice 20名、Tutorial 15名。2014年度以降はいずれも20名に統一した。
 - ⁱⁱⁱ 全クラスでこれらすべてを行っているわけではない。
 - ^{iv} Reading SectionとListening Section対策はPracticeとほぼ同じ。
 - ^v 他大学での取り組み例として、小山ら(2012)および森下(2014)などがある。
 - ^{vi} 合格後に辞退するケースもあるため、実際の参加者数とは異なる。また、留学先は英語圏とは限らない。

参考文献

- Beaumont, J., 2006, *NorthStar: Building Skills for the TOEFL® iBT, Intermediate*, Pearson Longman.
- Fellag, L. R., 2006, *NorthStar: Building Skills for the TOEFL® iBT Advanced*, Pearson Longman.

Stafford, M. D. & Tsunamori, C., 2010, *Power-up Trainer for TOEFL® ITP*, Cengage Learning.

小山俊輔, 松永光代, 田地野彰(編), 2012,『奈良女子大学 夏季英語実学講座「平成24年度 英語の授業実践研究」—TOEFLのための効果的英語学習法— 2012年度報告書』

田地野彰(編著), 金丸敏幸(著), 2012,『TOEFL ITP®テスト公式テスト問題&学習ガイド』研究社.

森下美和, 2014,「大学におけるTOEFL iBTの対策授業における実践報告—スピーキング・セクションを意識して—」『日本英語教育学会第43回年次研究集会論文集』pp.81-87